高田（たかだ）遺跡

発掘調査概報

1994

掛川市教育委員会

高田（たかだ）遺跡

発掘調査概報

1994

掛川市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成５年８月27日より平成６年３月25日まで実施した静岡県掛川市藤六1,296に所在する高田遺跡の発掘調査概報である。

2．調査は、高田遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。

3．現地調査ならびに整理作業では、次の方々の参加を得た。

本樫公太郎、大庭虎雄、青島信二、鈴木はつ子、村松さと、宮崎充子、豊田八重子、小沢ろく、山崎まち、山崎すぎ、松浦せい子、鈴木たに、鈴木辰江、長谷川幸子、伊藤和子、松井田鶴子、鈴木静江、弓桁きよ、大石トモ、堀内ひろ、袴田きよ、山崎国、鈴木秀子、鈴木千代乃、鳥居鈴江、青木嘉代子、五十嵐つね子

4．本書の編集、執筆は全て、掛川市教育委員会の井村広巳が担当した。

5．発掘調査の業務は、掛川市教育委員会教育長大西珠枝、社会教育課課長榛葉稔、文化係長澤村久雄のもとに社会教育課が所管した。

6．調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．挿図における方位は、真北を示す。

2．本書で使用した遺構名称は次のとおりである。

ＳＢ：竪穴式住居　　ＳＨ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＫ：土坑　　ＳＰ：柱穴

3．遺物実測番号は、写真図版と同一である。

目　　次

例　言
凡　例

第１章　発掘調査と遺跡の概要…… 1
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の方法と経過
　第３節　遺跡の位置と環境

第２章　調査の内容…… 9
　１）　竪穴式住居
　２）　掘立柱建物
　３）　その他

第３章　まとめにかえて…… 18

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図…… 3
第２図　遺跡の周辺地形図…… 5
第３図　遺構全体図…… 6･7
第４図　弥生時代後期～古墳時代前期住居跡配置図…… 8
第５図　ＳＢ36・37・38・41実測図…… 10
第６図　ＳＢ36、ＳＫ30実測図…… 11
第７図　ＳＨ01・06実測図…… 14
第８図　出土遺物実測図（１）…… 16
第９図　出土遺物実測図（２）…… 17

図版目次

図版Ⅰ　発掘区遠景（北から）
図版Ⅱ　発掘区全景
図版Ⅲ　調査前全景（西から）
　　重機作業風景
図版Ⅳ　東半部全景（北から）
　　西半部全景（北から）
図版Ⅴ　ＳＢ36完掘（北から）
　　ＳＫ30遺物出土状態（北東から）
図版Ⅵ　ＳＢ36・37・38・41完掘（北から）
　　ＳＨ01完掘（東から）
図版Ⅶ　出土遺物（１）
図版Ⅷ　出土遺物（２）

第１章　発掘調査と遺跡の概要

第１節　調査に至る経緯

高田遺跡が存在する和田岡地区は、縄文時代から古墳時代に至る遺跡が市内でも数多く分布する地域である。その中でも段丘縁辺部に広がる和田岡古墳群は、古墳時代中期に属し、その存在に関心が高まっている。

この和田岡地区は、掛川市内でも有数の茶処である。茶樹栽培の能率を図るため、改植が行われている。その際、天地返しといわれる土の入れ替えが行われるため、遺跡の消滅が免れない状況となっている。掛川市教育委員会では、こういった遺跡に対し、遺跡の記録保存を目的とし、発掘調査を行っている。今回、高田遺跡地内において調査地点の地主である鈴木正氏より、平成４年夏に改植をするとの連絡を受けた。それにより、掛川市教育委員会は、平成４年11月11日に試掘調査を行った。その結果、弥生時代後期と思われる遺構と遺物を確認した。協議の上、鈴木氏のご理解とご協力を得て、平成５年度に国および県の補助金を得て、掛川市教育委員会が発掘調査をするに至った。

第２節　調査の方法と経過

１）調査の方法

発掘調査は、排土の処理上、調査区を東西に二分して行った。まず、茶樹の抜根を重機により行った後、表土の掘削を行った。それから、人力により、粗掘、遺構の検出、遺構の掘削を行った。実測作業は、遺構全体図、土層図を1/20の縮図で、遺物の出土状態図を1/10の縮図で行った。測量のためのグリッド杭は、１辺５ｍ四方の区画で任意に設定した。それを業者に委託して、国家座標の読み取りをし、またベンチマークを設定した。杭は南北の列を南から１、２、３…と呼び、東西の列を東からＡ、Ｂ、Ｃ…と呼んだ。東西、南北のラインの交点をその杭の名称とし、グリッド名は北東角の杭の名称と一致させた。また調査範囲が広いため、ラジコンヘリコプターによる垂直写真撮影を、業者に委託した。

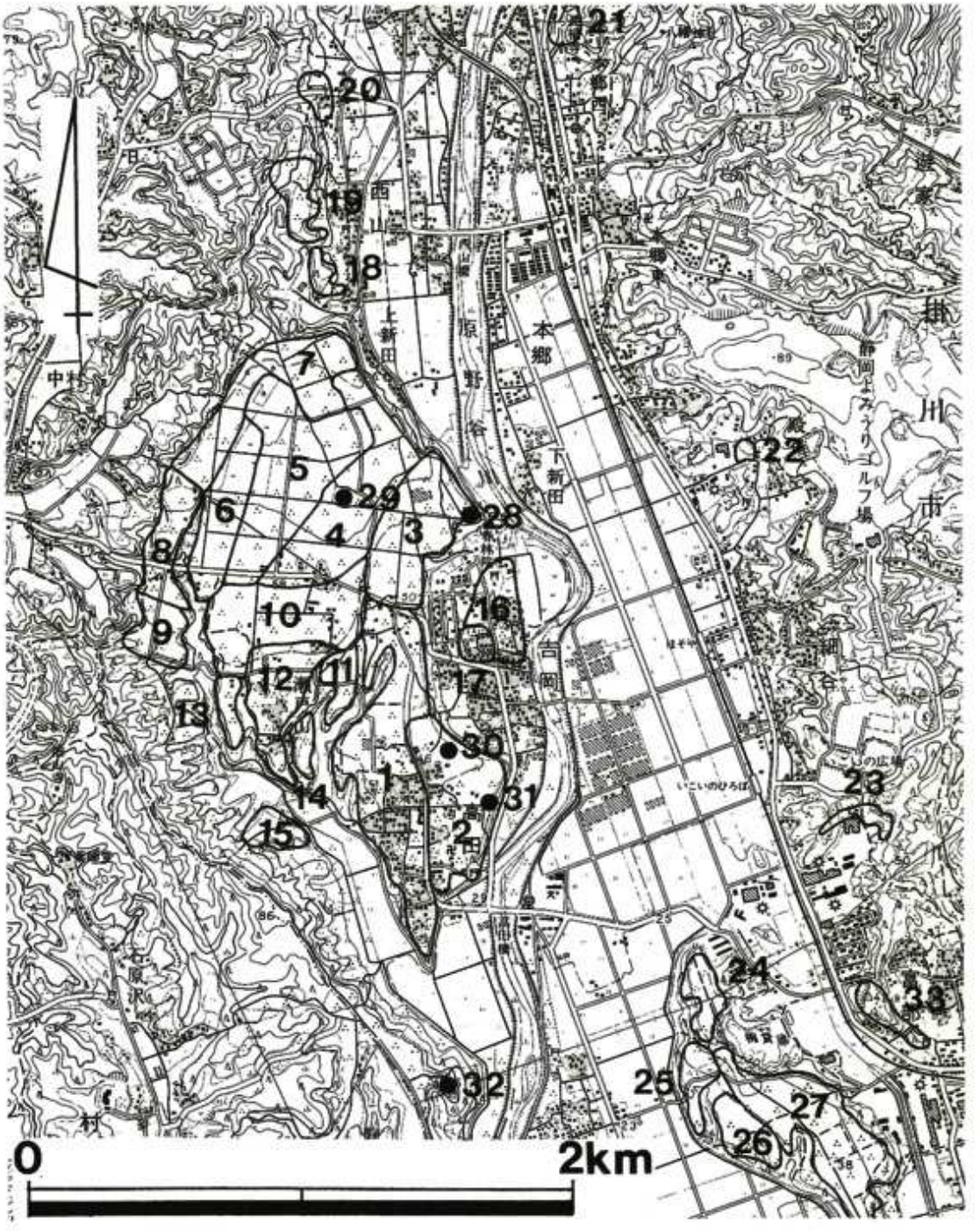
２）調査の経過

平成５年８月27日	発掘区の設定を行う。
８月30日～９月１日	東半部の重機による茶樹の抜根、表土の掘削を行う。
８月31日～11月19日	人力による粗掘、遺構の確認、遺構の掘削を行う。必要に応じて、土層断面図、平面実測図、土器出土状態図を作成する。また、基準点測量を行う。

11月22日～11月25日	東半部の発掘区の清掃を行い、全体の完掘写真、各遺構の完掘写真を撮影する。ラジコンヘリコプターによる撮影も並行して行う。
11月26日～12月３日	東半部発掘区の実測作業を行う。
12月４日～12月６日	東半部発掘区を重機により埋戻す。
12月７日～12月８日	西半部の表土掘削を、重機によって行う。
12月９日～１月７日	人力による粗掘、遺構の確認、遺構の掘削を行う。東半部と同様に、必要に応じて、土層断面図、平面実測図、土器出土状態図を作成する。
平成６年１月10日～１月12日	発掘区の清掃を行い、全体の完掘写真、各遺構の完掘写真を撮影する。ラジコンヘリコプターによる撮影も並行して行う。
１月13日～１月19日	発掘区の実測作業を行う。
２月４日	重機による埋戻しを行い、整地した後、調査区を地主へ引き渡した。
整理作業	出土した遺物は、水洗いした後、出土位置を土器にマーキングした。セメダインＣで接合、復元したのち、土器の実測を行う。現地で作成した図面は、報告書用に編集し、清書した。そして、原稿を書き、印刷に付した。

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	高田	縄文(中)、弥生(後)～古墳(中)	12	瀬戸山Ⅰ	縄文(早・中)、弥生(後)～古墳(前)	23	山崎	弥生(後)～古墳(前)
						24	岡津原Ⅰ	縄文(中)、弥生(中～後)
2	女高	弥生(中)～古墳(前)	13	瀬戸山Ⅱ	縄文(早・中・晩)、弥生(中・後)～古墳(前)	25	岡津原Ⅱ	縄文(中)
3	吉岡下ノ段	縄文(中・晩)、弥生(後)～古墳(後)、平安				26	岡津原Ⅳ	弥生(後)～古墳(前)
			14	瀬戸山Ⅲ	弥生(後)～古墳(前)	27	岡津原Ⅲ	縄文(中)、弥生(中)～古墳(前)
4	高田上ノ段	弥生(後)、古墳(中)	15	平田ヶ谷	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)			
5	中原	縄文(中)				28	春林院古墳	古墳(中)
6	溝ノ口	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)	16	林	古墳(前～後)、中世	29	大塚古墳	古墳(中)
			17	西村	古墳(前～後)、中世	30	行人塚古墳	古墳(中)
7	東原	縄文(晩)、弥生(後)～古墳(前)	18	中山	弥生(後)～古墳(前)	31	瓢塚古墳	古墳(中)
			19	後藤ヶ谷	弥生(後)～古墳(中)	32	各和金塚古墳	古墳(中)
8	今坂	弥生(後)～古墳(前)	20	久保	弥生(後)	33	二反田	弥生(中)
9	大向	縄文(中)	21	長福寺西	縄文(後)～弥生(後)、中世			
10	吉岡原	縄文(中・晩)、弥生(後)～古墳(前)	22	殿ノ台	弥生(後)			
11	花ノ腰	弥生(後)～古墳(前)						

第１表　周辺遺跡一覧表



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

第3節　遺跡の位置と環境

掛川市は、静岡県の中西部に位置する。東海道新幹線の駅ができたことを契機として、東名高速道路のインターチェンジの開設、そして掛川城天守閣の復元と、街は大きく変わりつつある。このような市街地の変貌に比べ、高田遺跡が存在する和田岡地区の変化は少なく、江戸時代の中頃から始まったといわれている茶樹の栽培が現在も引き継がれており、今でも鮮やかな茶樹の緑が一帯に広がっている風景が見られる。

和田岡原は、掛川市の南西部、原野谷川が形成した段丘上に位置する。標高60m前後の上位段丘面と標高40～50m前後の下位段丘面に区分される。高田遺跡は、その下位段丘面に位置している。地表から60～80cm下では、段丘堆積物である礫層が確認された。段丘は、南西部に開析がみられ、小さな谷が入り組んでいる。今回の調査地点は、この小さな谷を真近にした段丘の縁辺部にあたる。

歴史的な観点から和田岡原をみてみると、すべてに遺跡が存在するといっても過言ではないほど、遺跡の分布がみられる。遺跡地名表によると、和田岡原で最も古い遺跡は瀬戸山Ⅰ遺跡で、縄文時代早期とされている。しかし、発掘調査では、縄文時代中期の土器のみが、確認されている。また、中原遺跡では、縄文時代中期の土器が遺構を伴って出土しており、これまでの調査結果によると、確実に人々の生活がうかがえるのは、縄文時代中期であるといえる。その後しばらくの間、集落は途切れているようである。そして、弥生時代後期後半から集落は爆発的に増加し、古墳時代前期へと引き続いている。しかし、現在のところそれに続く古墳時代中期の集落は、確認されていない。一方、段丘縁辺部には、和田岡古墳群と呼ばれる各和金塚、春林院、大塚、瓢塚、行人塚といった古墳時代中期の大型の古墳が造られていく。これらの古墳は、原野谷川流域の首長墓であり、それらを造営した古墳時代中期の集落も和田岡原に存在したと推定される。

《参考文献》

掛川市教育委員会　1982年　『掛川市遺跡地名表』

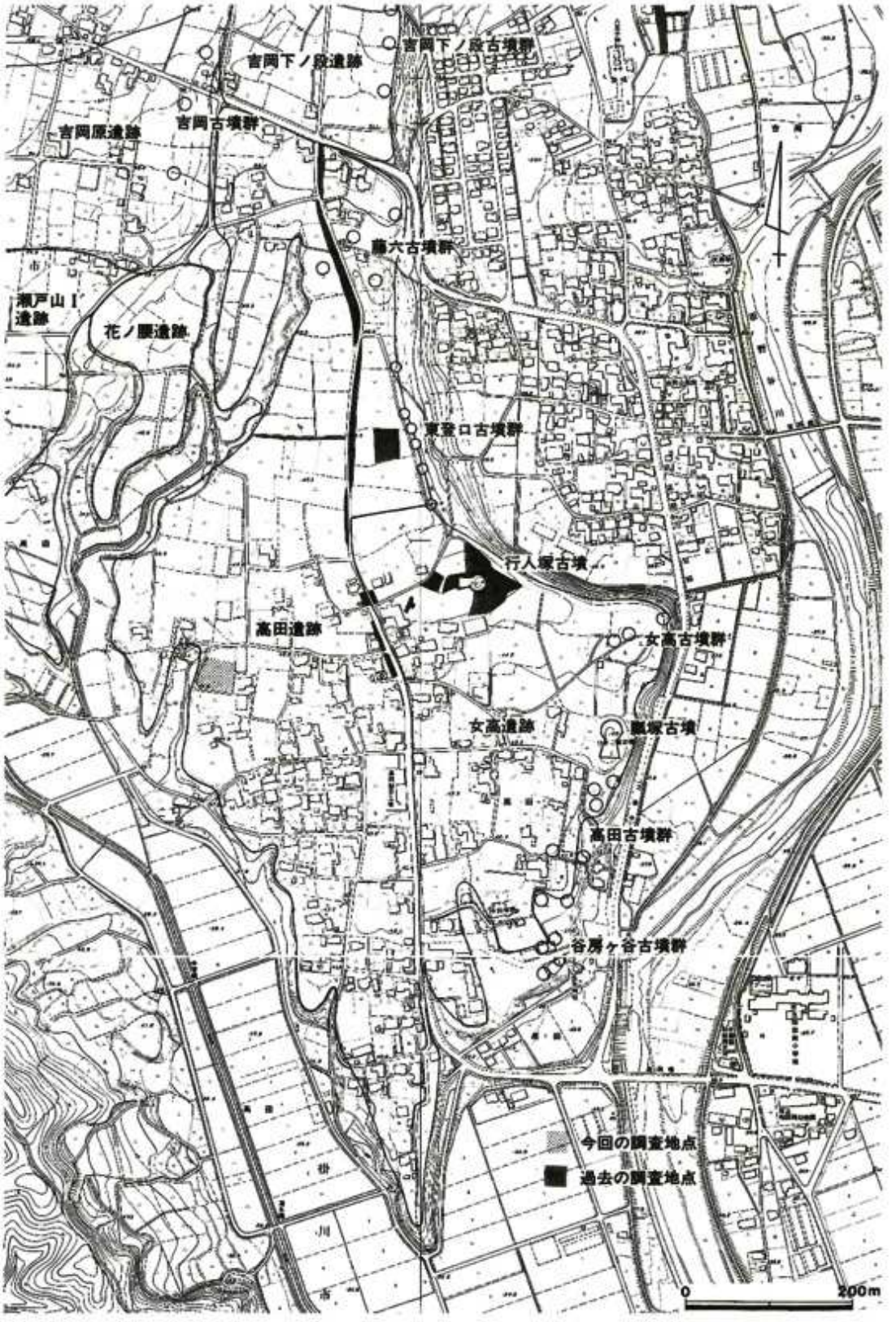
掛川市教育委員会　1983年　『掛川市遺跡地図』

掛川市教育委員会　1984年　『中原遺跡発掘調査報告書』

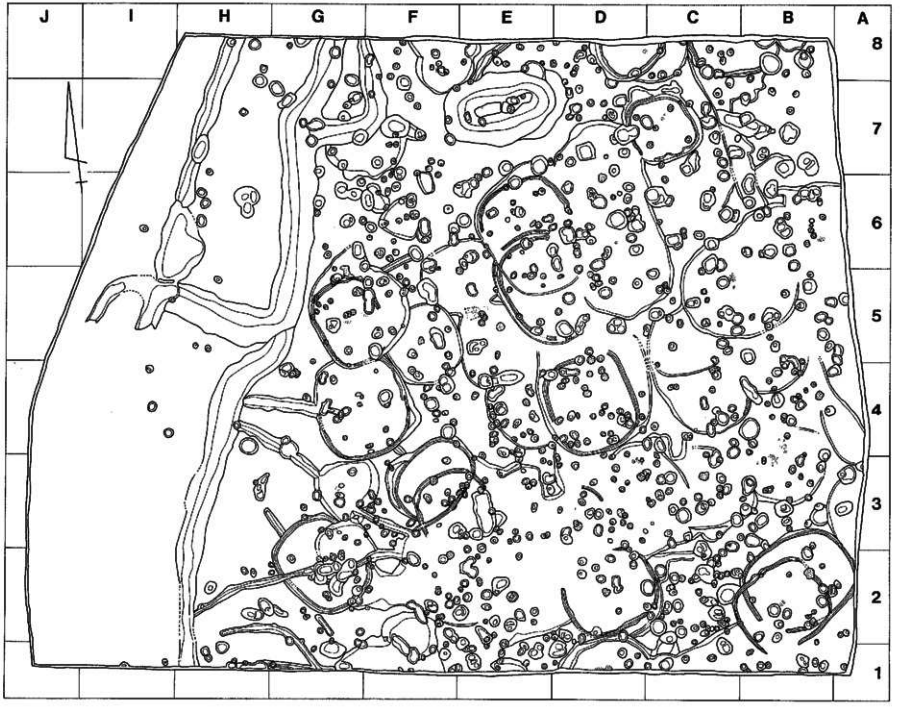
掛川市教育委員会　1988年　『中原遺跡発掘調査報告書』

掛川市教育委員会　1987年　『瀬戸山Ⅰ－a遺跡発掘調査概報』

掛川市教育委員会　1987年　『瀬戸山Ⅰ－b遺跡発掘調査報告書』



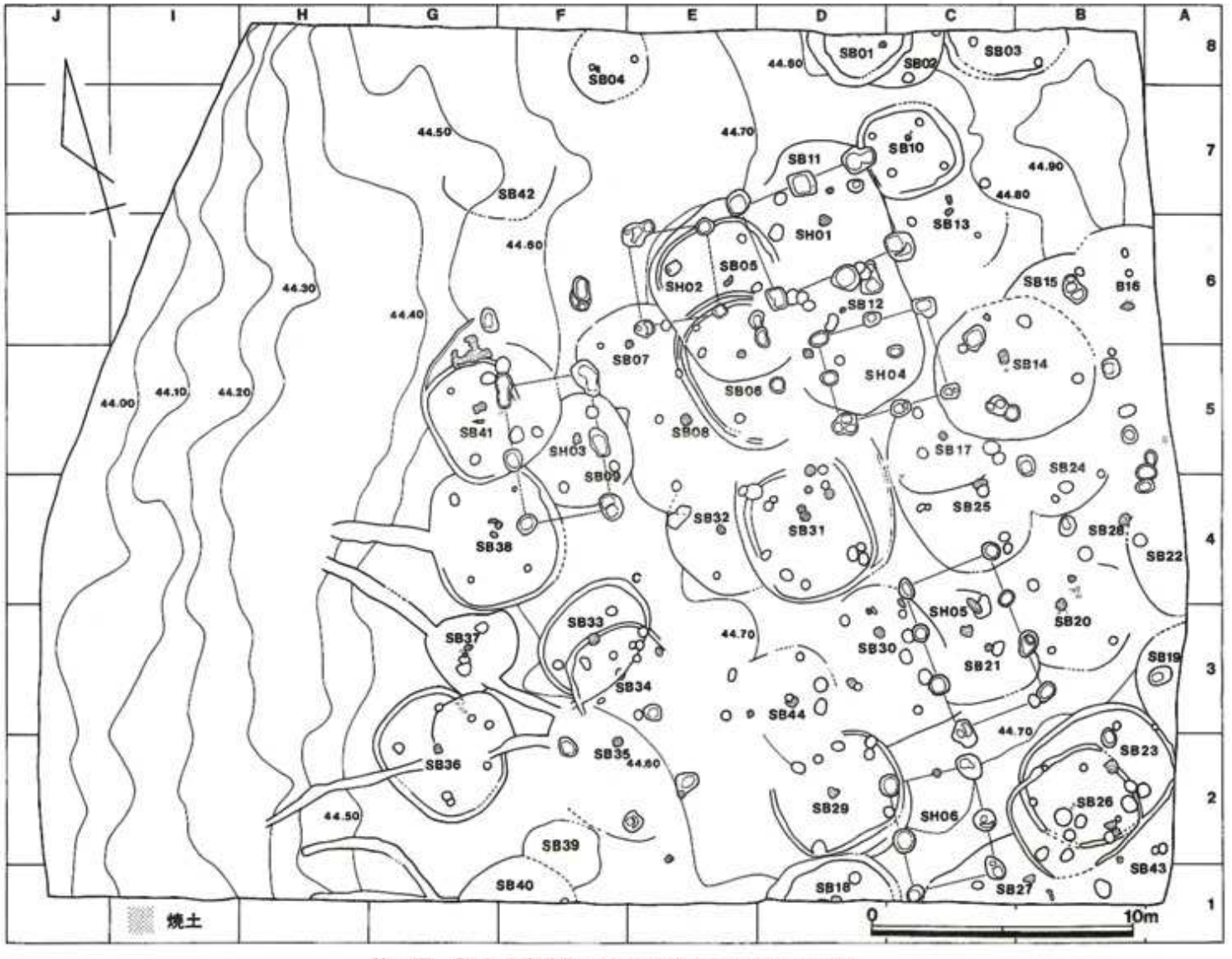
第２図　遺跡の周辺地形図



焼土

0 10m

第3図　遺構全体図



第 4 図　弥生時代後期～古墳時代前期住居跡配置図

第２章　調査の内容

当初の予定では、３ヶ月の現地調査であったが、重機掘削後の遺構検出の段階で、予想をはるかに上回る住居跡群が確認された。現地調査の時点で、竪穴式住居43軒を検出した。しかし炉が単独で検出された状況からみて、掘り方は確認しえなかったが、さらに多くの竪穴式住居が存在したと思われる。竪穴式住居は、検出したすべてが切り合いをもち、完全な形状をみることができるものは、ほとんどなかった。調査区西側の谷に近づくにしたがい、切り合いは少なくなっていることがわかる。また、掘立柱建物を６棟検出した。柱穴の検出状況から、Ｂ－４区から５区にかけて、掘立柱建物がさらに存在する可能性も考えられる。これらは、弥生時代後期後半から古墳時代前期に属するものである。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構の他、Ｃ－２区から縄文時代中期の土器を出土するピットを検出した。また遺構に伴わないが、遺構検出時に、数点の縄文土器が出土した。その他に、中世の溝も住居跡上面から検出した。

このように、今回の調査では、数多くの資料を得ることができたが、本書では概要報告として、数軒の住居跡と掘立柱建物について述べるに留めたい。

１）竪穴式住居跡

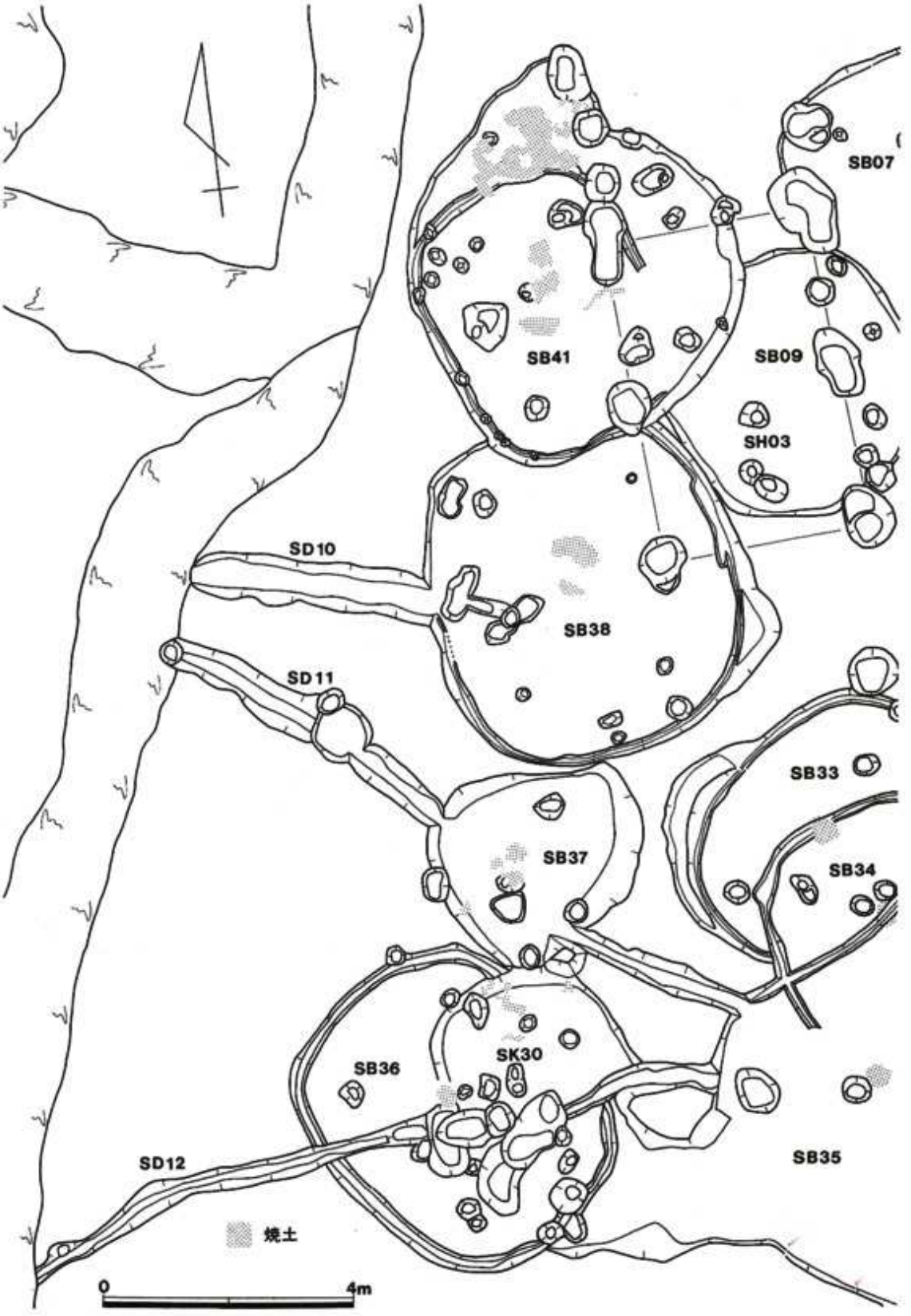
形状がはっきりしているＦ・Ｇ－２区からＦ・Ｇ－５区に広がる住居跡について簡単に述べ、その中のＳＢ36とＳＫ30について出土土器を含めて、詳しくみていくことにする。

ＳＢ37（第５図）

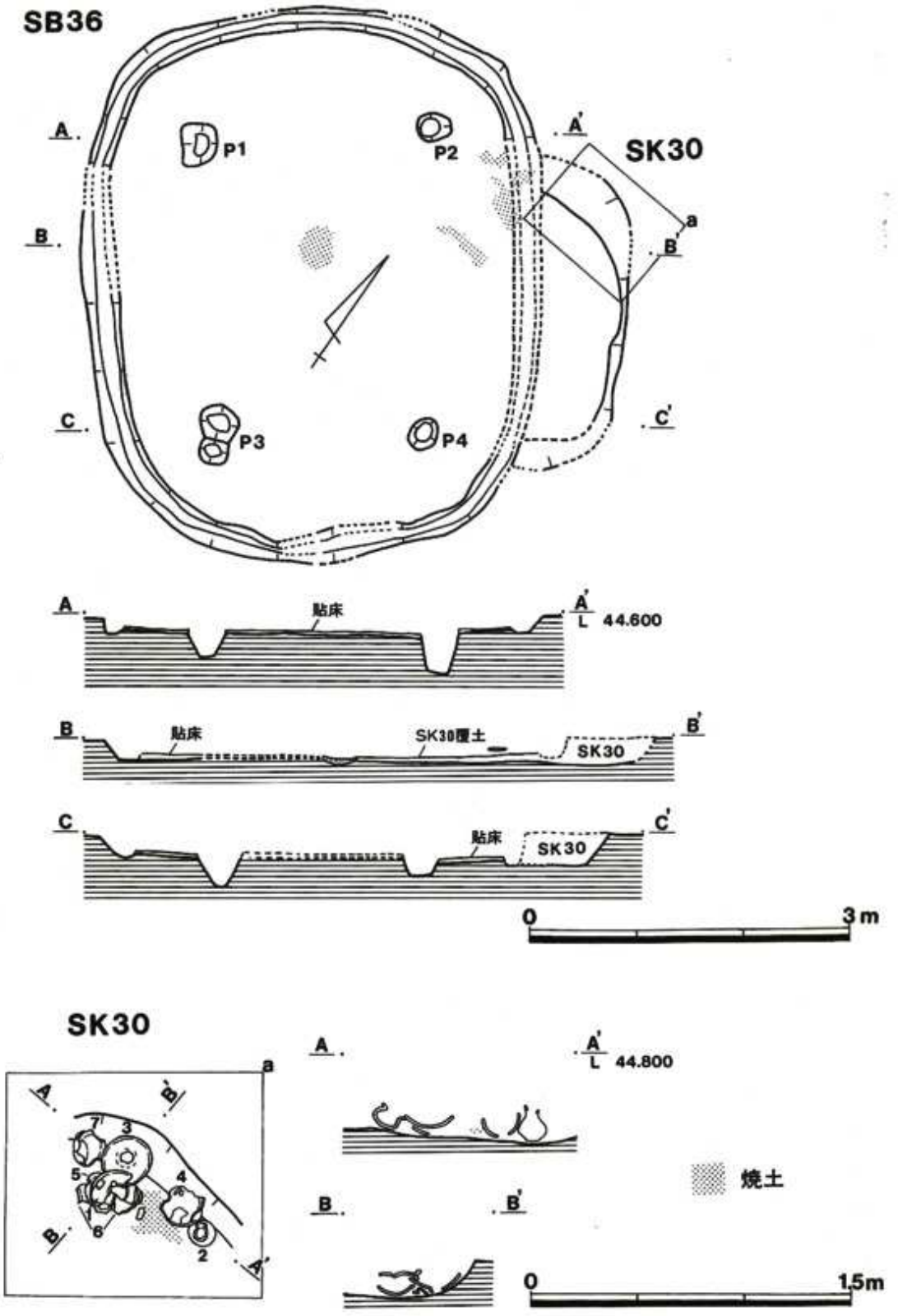
Ｆ・Ｇ－３区に位置する。大きさは、長軸3.5 m、短軸３ｍで不整形である。柱穴は３本検出したが、柱が立つような配置ではない。柱穴の深さは５～10cmと浅い。炉と認められる焼土が中央に確認されたため、住居跡と認識した。土器は、小破片が多く、折り返し口縁壺や壺底がみうけられた。住居跡の北西と南東からＳＤ11が延びているが、土層観察によると住居跡に伴うものであるか不明であった。

ＳＢ38（第６図）

Ｆ・Ｇ－４区に位置する。東西５ｍ、南北5.5mの隅丸方形である。北側に位置するＳＢ41に切られている。深さは、検出面から10cmほどである。壁溝は、ＳＢ41に切られる北側と北西コーナーを除き、検出した。柱穴は４本確認された。炉は、ほぼ同位置に２箇所確認されたため、建て替えが行われたと思われる。



第5図　SB36・37・38・41配置図



第6図　ＳＢ36，ＳＫ30　実測図

ＳＢ41（第６図）

Ｆ・Ｇ－５区に位置する。ＳＢ09、ＳＢ38を切っている。建て替えが認められ、小さい方は、長軸4.5m、短軸3.5mの隅丸方形で、大きい方は、５m四方の隅丸方形である。炉は上面と下面にそれぞれ確認された。小さい住居跡には、壁溝がめぐらされており、壁溝内には、小ピットが検出された。

ＳＢ36、ＳＫ30（第６図）

ＳＢ36、ＳＫ30は、Ｆ・Ｇ－２区から３区にかけて検出された。ＳＢ36はＳＫ30を切っている。

ＳＫ30は、長軸３m、短軸2.5mの楕円形である。覆土は、黒褐色土で、住居跡の覆土とほとんど区別がつかなかった。土坑の北東部には、土器が集中して出土した。破損しているものもあるが、第６図２の壺は、正位の状態であり、４は、焼土の上にのっていることがわかる。

ＳＢ36は、長軸5.5m、短軸4.5mの隅丸方形である。壁溝は、全周していたと思われるが、ＳＫ30と交差する部分においては、確認できなかった。北西部の壁溝内より壺、甕の破片が多く出土した。貼床は、他の遺構と切り合い関係のない北側部分では、顕著に認められたが、ＳＫ30と交差する部分、ＳＤ12より南側では、確認できなかった。柱穴は、４本確認した。深さは、15～20cmであった。中央やや北寄りに炉が検出され、北東部には、うすい焼土が広がっていた。ＳＢ36は、西側に延びるＳＤ12に切られ、また住居跡中央の不整形なピット群にも切られていた。

出土土器は、ＳＫ30に伴うものを第８図１～７、ＳＢ36に伴うものを第９図８～14に示した。

１は、折返口縁部の壺である。折返部分の断面は、正方形である。内外面ともに摩滅が激しく、調整は不明瞭であった。内面に円形貼付文の痕跡が認められた。

２は、小型の折返口縁部の壺である。口縁部外面には、横ナデののち、櫛刺突文を施している。頸部は縦ハケののち、横ナデをしている。体部は、肩部に櫛押圧横線文を、その下方に縄文による羽状文を施している。そして、その後体部下半にヘラミガキを行っている。丁寧なつくりである。

３は、口縁部が内湾する広口壺である。口唇部には、水平な面をもち、そこには、縄文を施している。また、口唇部外面には、小さな刻目をもつ。外面は、縦ハケによる調整がなされ、頸部には、横ナデを施している。内面は、櫛描き波状文（扇形文を繰り返している）を４段施している。

４～７は、台付甕である。口縁部はゆるやかに屈曲している。すべて表面にススが付着していた。**４・５**は、口唇部をハケにより面取りし、刻目を施している。**４**は、他の甕に比べ丁寧な調整がなされており、全体を縦ハケした後、体部上半に横ハケを施し、さらに頸部下には、斜めハケを施している。

６は、４、５同様に口唇部をハケにより面取りしているが、刻目を有していない。外面のハケ調整は、縦ハケのみである。またこの甕は、台部に粘土帯をもっている。これは、弥生時代後期の西遠江の伊場式土器の影響を受けたものと考えられる。

7は、口唇部が欠損しており、内外面ともに摩滅がめだつが、わずかに縦ハケが確認された。以上が、ＳＫ30の出土土器である。

次にＳＢ36の土器であるが、8～10は覆土から出土した。8は、折返口縁部の壺である。内外面ともに摩滅していたが、内面にわずかに櫛描き波状文を施しているのが認められた。9は、単純口縁部の壺である。口縁部はやや内湾している。10は、複合口縁部の壺である。複合部分に縄文を施した後、棒状貼付文をつけている。破片では、３本の貼付文が認められたが、単位方向は不明である。

11、12は、床面から出土した。11は、高坏脚部である。坏部と脚部の境には、櫛による羽状刺突文が施されている。脚部には、ヘラミガキを行い、裾部には、縦ハケを施している。裾部の屈曲は、明瞭ではない。12は、鉢の口縁部である。口唇部は、面取りをし、刻目をもっている。口縁部には、粗いハケを施したのち、棒状貼付文をつけている。破片から貼付文の単位方向は不明である。

13、14は、壁溝内より出土した。13は、わずかに輪状底である。14は、台付甕の破片である。頸部は、くの字に屈曲している。口唇部は、面取りをし刻目をもつ。全体にススが付着していた。以上がＳＢ36の出土土器である。ＳＢ36は、複合口縁部壺の存在や高坏の形状などから、弥生時代後期の菊川式様式の新段階に属するといえよう。

２）掘立柱建物（第４図）

掘立柱建物は、６棟検出した。東西方向に桁行をもつＳＨ01とＳＨ04以外の４棟は、ほぼ真北に近い棟方向を示していることがわかる。この６棟の中から東西方向に桁行をもつＳＨ01と南北方向に桁行をもつＳＨ06についてみていきたい。

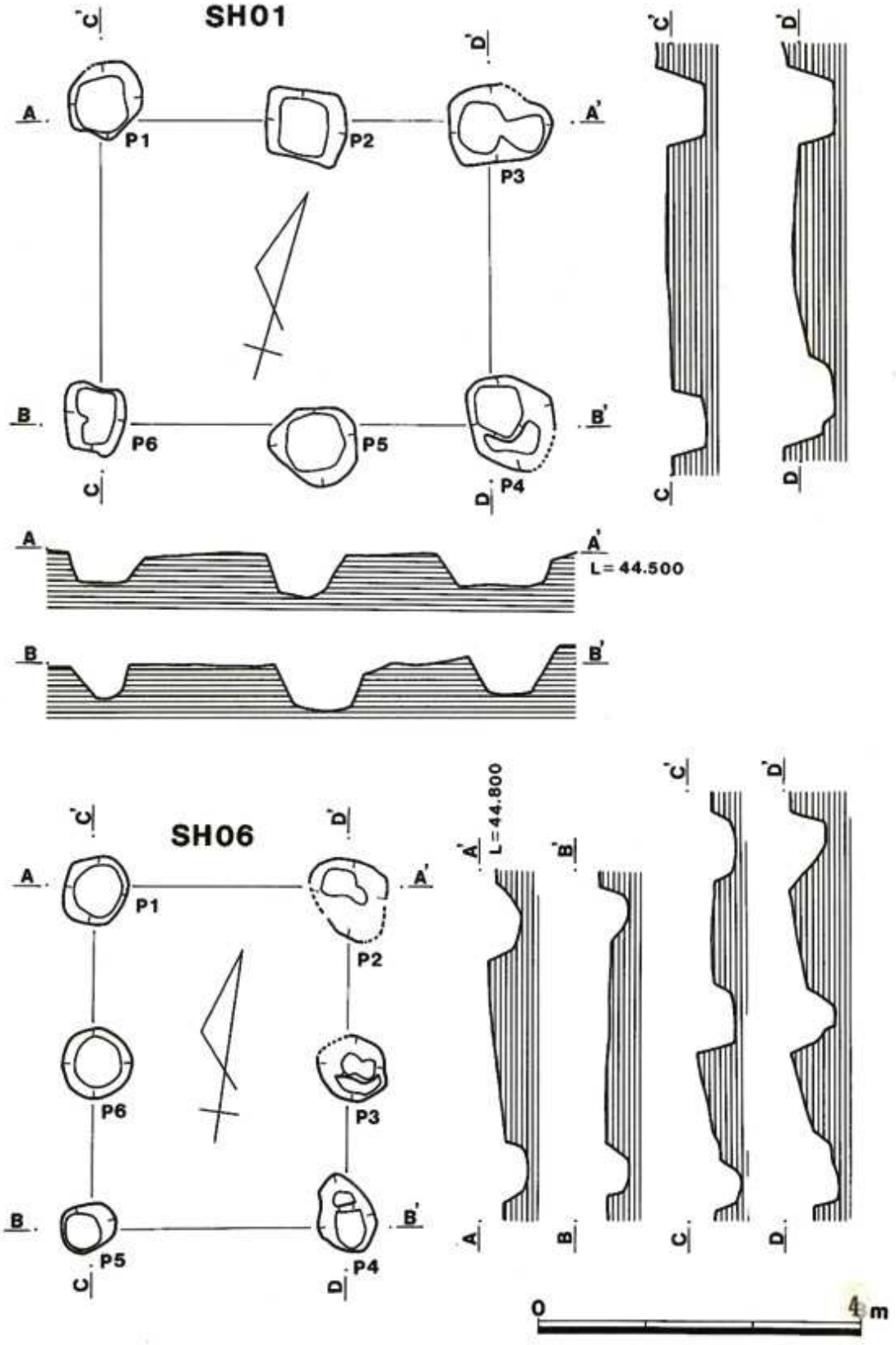
ＳＨ01（第７図）

Ｄ－６区～７区にかけて検出された。梁間１間、桁行２間である。規模は、４ｍ×５ｍを測る。ＳＢ10、11を切っている。柱穴の掘り方は、１ｍ弱の大きなもので、深さ40cmほどであった。覆土は、黒褐色土である。Ｐ１は覆土中位に土器と焼土ブロックを含み、黄白色の粘土ブロックをそれらの下位に含んでいた。

出土遺物は、第９図15～19に示した。15～18がＰ１からの出土である。

15、16はＳ字状口縁の甕である。15は、体部の破片、16は、体部と脚部の接合部分にあたる。15の口縁部は、欠損していたが、鋭くくの字形に屈曲するもので、赤塚分類のＣ類に当たるものである。頸部の折れる部分に沈線を施している。体部は、ハケ調整をしている。

17、18は、高坏脚部である。17は、摩滅が激しく、調整は不明瞭である。18は、３方向に透かしをもち、裾部を外側に広げている。内面には、横ナデを施している。19は、Ｐ２から出土した小型高坏である。形状は、いびつである。脚部は、粗い縦ハケを行い、ゆるやかに内湾している。坏部との接合部分には、縦ハケが認められた。坏部の調整は、不明瞭であった。



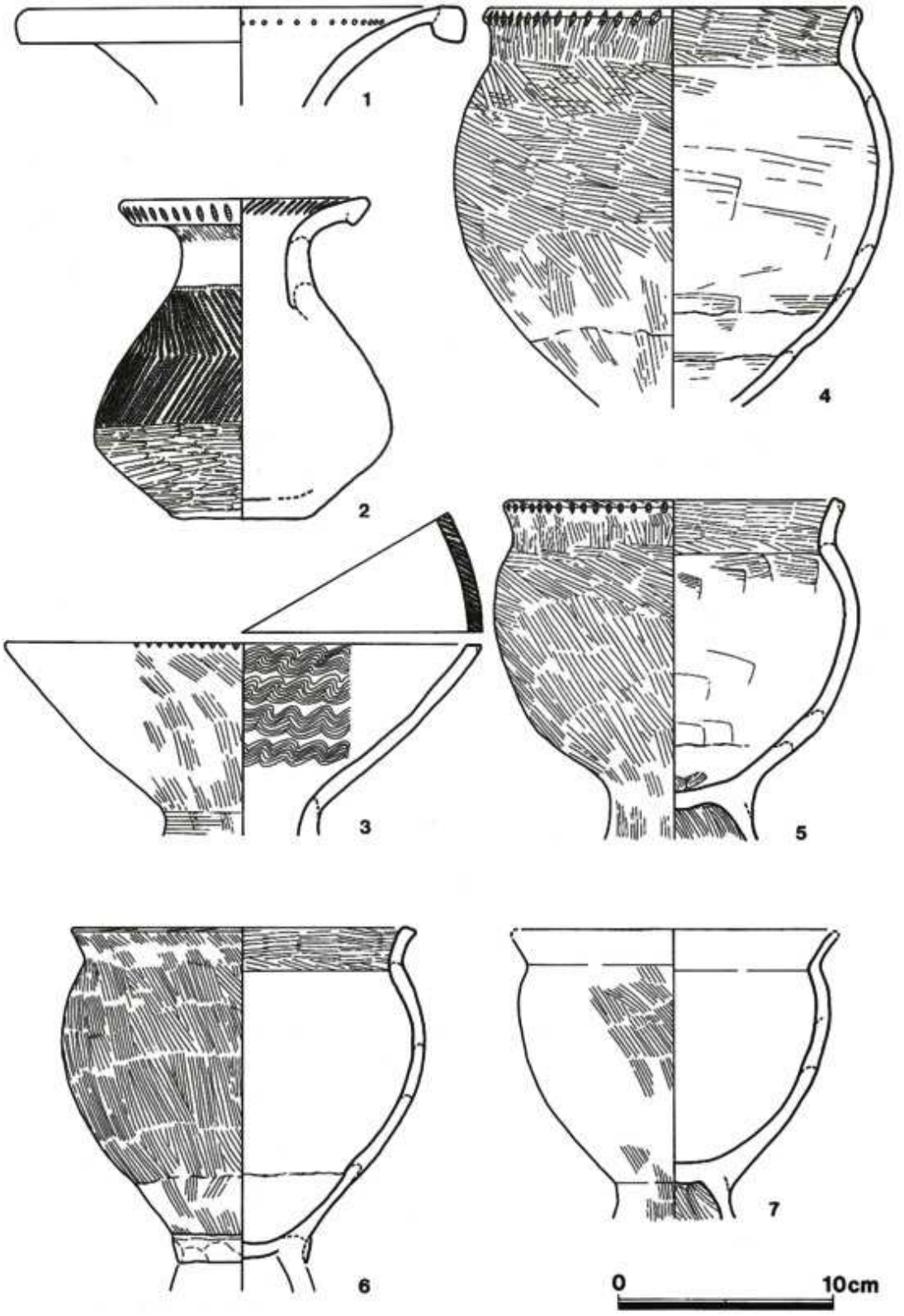
第7図　SH01・06実測図

ＳＨ06（第７図）

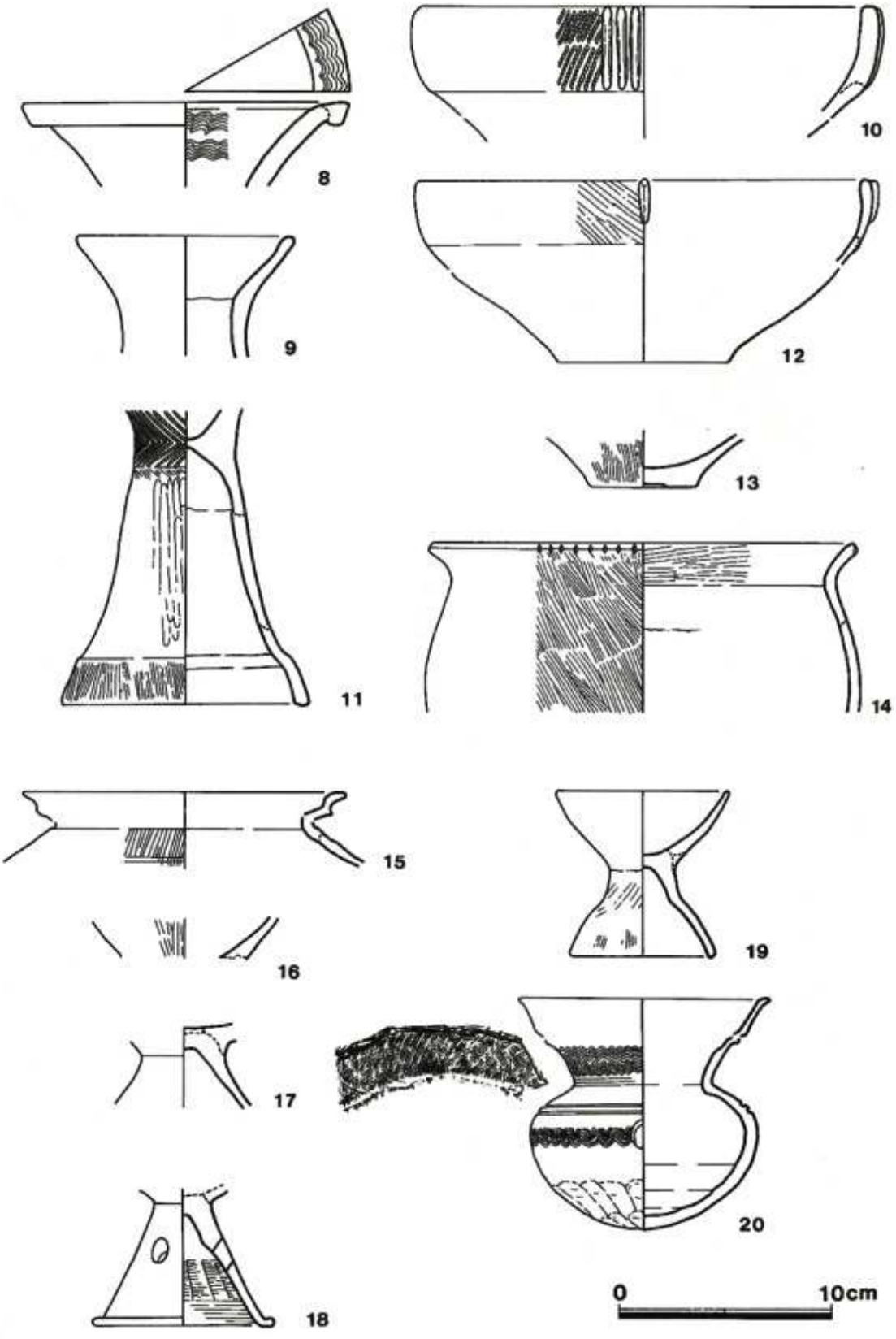
Ｃ－１、２区から検出された。梁間１間、桁行２間である。規模は、3.5m×４ｍである。柱穴の掘り方は、直径70～80cmの円形で、深さ30cmを測る。出土遺物は、小破片で図示できるものはなかった。

３）その他

第９図20に示した壺は、重機掘削中に出土したもので、Ｆ・Ｇ－４区に広がるＳＢ38の検出面から出土した。ＳＢ38の掘り方の南東部に位置する。ＳＢ38は、出土遺物から弥生時代後期と認められ、出土した壺は、住居跡の復土を切ってつくられた新しい遺構に伴うものと思われる。しかし、調査では、その掘りこみを確認することができなかった。口縁部は欠損していたが、段をつくりだしていることがわかる。頸部には、カキメ調整の後、細かい波状文を施している。肩部には、２条の沈線をめぐらし、その直下に波状文を施している。文様を切って円孔が穿たれている。体部下半は、手持ちのヘラ削りをしたのち、ナデ調整をしている。この壺は、陶邑編年のＴＫ23段階に相当するとおもわれる。



第8図　出土遺物実測図(1)



第9図　出土遺物実測図(2)

第3章　まとめにかえて

広範囲に及ぶ高田遺跡であるが、今回の調査地点が集落の中心部であったのではないかと思われる。現在の段階では、テンバコ20箱の出土土器もまだ整理途中であるため、全容を明確にすることができない。現時点でわかった事柄を箇条書きにしてまとめにかえたいと思う。

1．高田遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた集落である。
2．弥生時代後期から古墳時代前期の遺構以外に、縄文時代中期中葉の勝坂Ⅱ式の土器を出土したピットが確認された。
3．住居跡が、密集し、何度も建て替えが行われていることから、生活をする上で適した場所であったと思われる。調査区西側の谷には、今でも湧水があり、当時も水の便がよかったと考えられる。
4．5世紀末の須恵器が出土した。遺構ははっきりしなかったが、土壙墓であった可能性が高い。

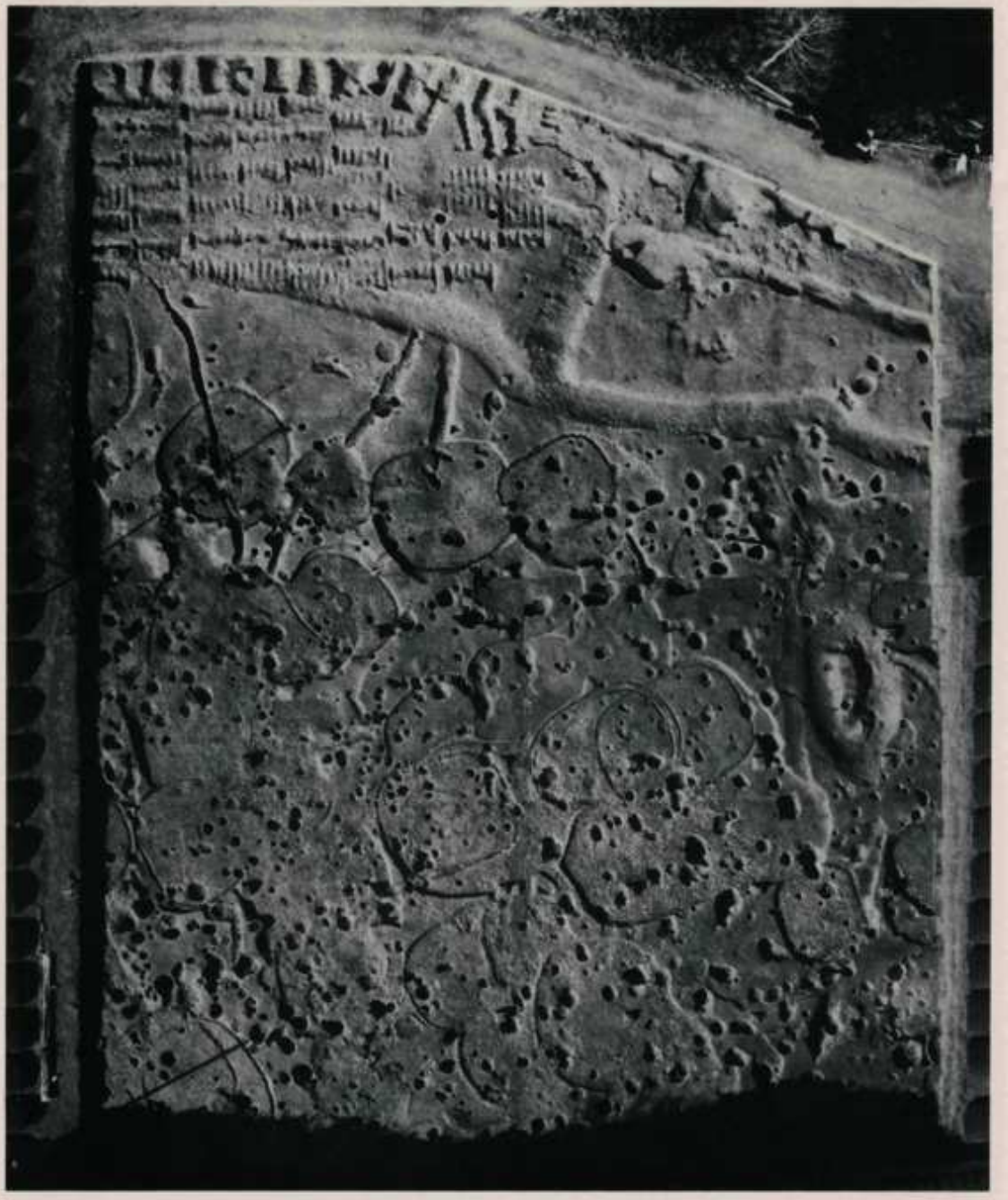
今回の調査は、調査面積に対し内容の濃いものであったが、概報ということで全ての遺構・遺物を掲載することができなかった。本報告は、別の機会に作成し、高田遺跡の様相を明確にしていきたいと思う。

図　　版

発掘区遠景（北から）

図版 1

図版 II



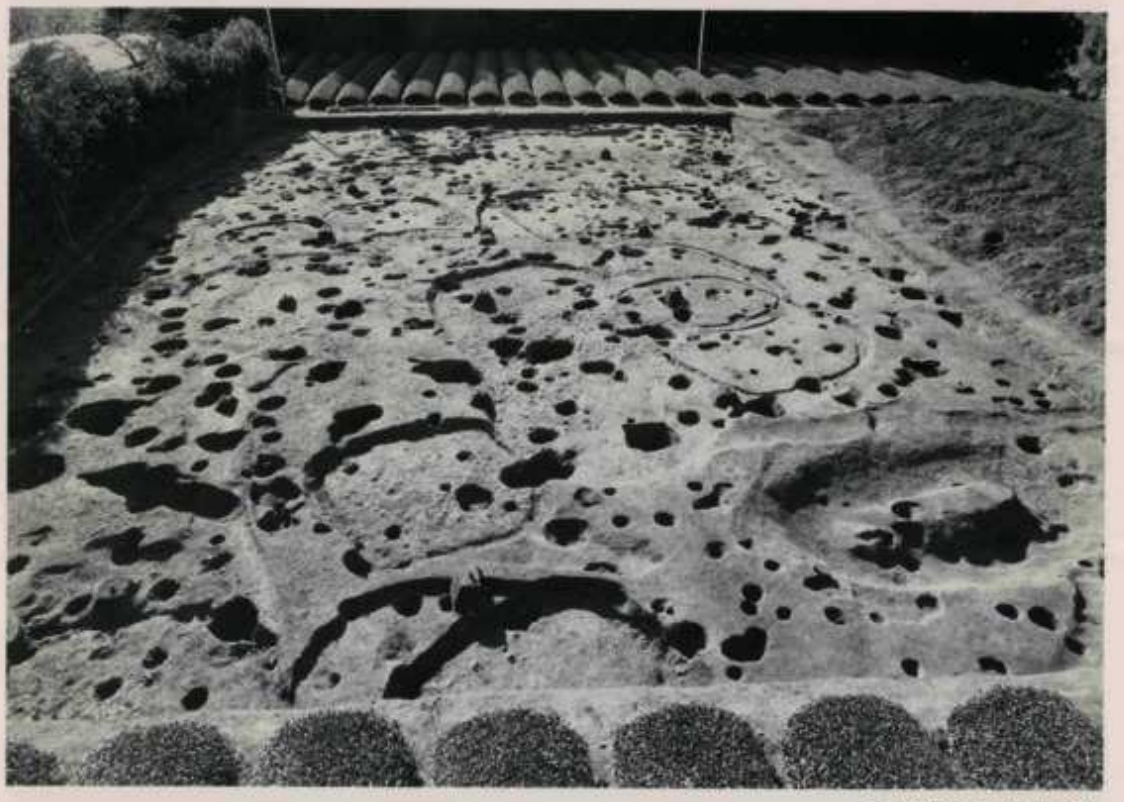
発掘区全景

図版 III

調査前全景（西から）

重機作業風景

図版 IV



東半部全景（北から）

西半部全景（北から）

図版 V

SB36完掘（北から）

SK30遺物出土状態（北東から）

図版 VI

SB36・37・38・41完掘（北から）

SH01完掘（東から）

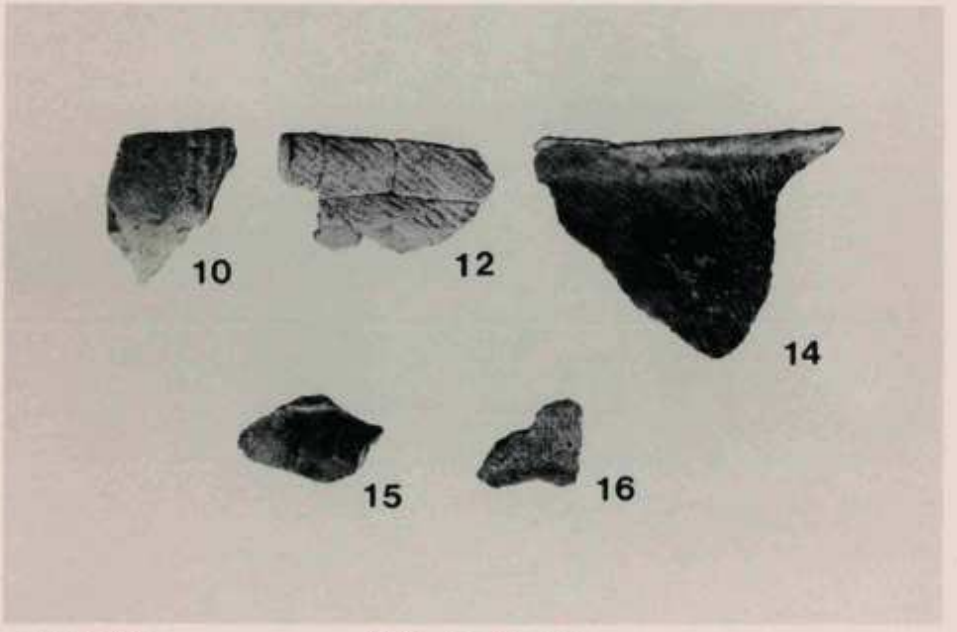
図版 VII

出土遺物(1)　SK30　2
3
4

SK30　5
6
7

SH01　19・18

20



出土遺物(2)

SB36　10・12・14
SH01　15・16

高　田　遺　跡
発掘調査概報

1994年3月

編集発行　掛川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL(0537)24－7773

印　　刷　株式会社　三　創
静岡市中村町166－1
TEL(054)282－4031